

外交政策における水資源 -国際河川の開発利用を巡る中国と周辺諸国の関係-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陳, ヨウ旭 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/00023135

2022年12月24日

「博士学位請求論文」審査報告書

審査委員 (主査) 政治経済学部 専任教授

氏名 伊藤 剛

(副査) 政治経済学部 専任教授

氏名 大六野 耕作

(副査) 政治経済学部 専任教授

氏名 堀金 由美

1 論文提出者 陳 ヨウ旭

2 論文題名

(邦文題) 外交政策における水資源—国際河川の開発利用を巡る中国と周辺諸国の関係—

(欧文題) Water resources in Foreign Policy: Transboundary Rivers and China's Relations with Neighboring Countries

3 論文の構成

本論文は、国際河川をめぐる領土保全、電力、資源開発、環境といった一連の問題を国際政治学の視角から論じたものである。日本には、国際河川がない。しかし、国境を隔てる河川は、ともすれば国家間紛争を惹起する大問題である。しかも、国際河川は当事国のみならず、第三国の船舶通過・利用も可能とする場合がある。つまり、利害が複雑に錯綜している場である。

論文自体は、前半に当該問題の概観と理論的視角の提示を行い、後半において事例研究を行っている。事例として、ASEAN 諸国とのメコン川、インドとのプラマプトラ川、中央アジアにおけるカザフスタンとのイリ・エルティシ川と、北朝鮮との鴨緑江、そしてこれらの河川の上流にあるチベット高原の環境問題等、中国を包摂する主要な河川をめぐる課題を取り上げ、それぞれについて問題の概観、信頼醸成、国家間協力のための制度化がどの程度図られているかについて検証している。同時に、河川問題と海洋問題との関連にも触れ、国益と協調とのバランスを探る問題提起を行ったものである。本論文の構成は、以下のような章立てになっている。

第1章 序論

1. 問題の所在:なぜ国際河川からの視点なのか
2. 研究目的:中国の周辺諸国との関係の中の国際河川
3. ハイドロポリティクス(水政治学)と覇権安定論:先行研究及び本研究の理論的支柱

4. 研究方法:比較事例研究のメリット及び事例の選択とデータの収集
5. 本研究の意義及び論文の構成

第2章 中国国内の水資源ガバナンス

1. 中国が抱える水資源問題
2. 中国の水資源ガバナンス・システム
3. 中国の水資源開発プロジェクト
4. 「水利治国」—中華文明と水

第3章 気候変動下のチベット高原—世界で最もユニークな水資源貯蔵所

1. チベット高原の概況
2. 気候変動が水資源の安全保障に及ぼす影響
3. 気候変動がチベット高原に与える他の諸影響

第4章 一带一路構想の中の中国水外交

1. 水外交の定義に関する諸議論
2. 一带一路の構築が臨む水資源安全確保の挑戦
3. 国際・地域・国内レベルから見る中国外交が直面する課題
4. 一带一路構想の中における水資源外交の位置づけ

第5章 東南アジアのメコン川を巡る中国と ASEAN5 カ国の協力と対立

1. メコン川とはどのような川なのか
2. 冷戦終結以来の中国と ASEAN のメコン地域への関与
3. メコン川の上流域における中国のダム建設
4. 2010 年メコン危機—中国が直面した批判と中国の反応

第6章 南アジアのブラマプトラ川をめぐる中国とインドの紛争

1. ブラマプトラ川開発の実態
2. 領土紛争に由来する両国の相互不信及びインドの「中国水脅威論」
3. ブラマプトラ川における両国国益の相違及び打開策の提言

第7章 中央アジアにおけるイリ・エルティシ川をめぐる中国とカザフスタン及びロシアとの協調関係

1. エルティシ川とイリ川上流における中国・新疆の水資源開発及びその要因
2. 中国の水資源開発に対するカザフスタンの懸念
3. 中国—カザフスタンの国際河川における協力のメカニズム及びその課題

第8章 北東アジアの図們江・鴨緑江をめぐる中国と北朝鮮及びロシアとの不自然な関係

1. 中朝露、流域諸国の関係をめぐる歴史背景
2. 中朝協力の議題:水力発電・航行用水路・河川内の島に対する開発及び水質汚染

3. 地政学に基づく北東アジア地域の国際河川の分析

第9章 比較の結果および結論

1. 比較の結果及びリサーチクエスチョンへの答え
2. 南シナ海問題からの波及的影響
3. 政策提言

主要参考文献

4 論文の概要

本論文は、前半の概観と理論的視角、そして後半の事例研究と大きく分かれている。

前半は、第1章から第4章までである。序論としての第1章においては、問題提起として、なぜ国際河川を取り上げるのか、中国の周辺諸国との関係の中の国際河川はどのような存在なのか、覇権安定論からみる先行研究及び本研究の理論的支柱、事例の選択とデータ収集方法を紹介している。

第2章では、中国水資源全体上の状況を紹介すると同時に、中国の水資源管理計画や水資源ガバナンス・システムを説明している。その上で、古代歴史の時代から毛沢東の時代までの「水利帝国」としての中国はどのような存在であったのかを説明し、中国の政治指導者に理工系出身者が多い点に注目し、こうした中国の伝統文化と指導層の教育歴が中国の外交戦略を影で支えていることを検証している。

第3章は地政学・国際関係論の視点から、気候変動がチベット高原の水資源確保に与える影響を分析する。まずはアジアの給水塔としてのチベット高原の概況を説明し、その後、気候変動がチベット高原水資源の安全保障に及ぼしうる影響を解明し、それらの影響は食料安全の他に、民族紛争と地域不安の引き金にもつながるとの分析結果を述べる。

第4章は、水外交の諸定義に基づき、一帯一路構想に伴う中国の水外交の現状を解明する。まず、中国周辺の三つの地域の国際河川を比較考察し、中国と一帯一路沿線諸国がともに直面する水危機の実態を概観する。次に、こうした水資源の逼迫状態を引き起こした国際的・流域的・地政学的及び中国国内的要因を考察し、その上で、水資源の一帯一路構想の中の位置づけ及び重要性を議論し、国際河川に関して、中国の水外交が何を狙っているのかを解明する。

次に、後半部分の事例研究は、第5章から第8章までである。第5章は、国際レジーム論から考えた東南アジアメコン河における中国の協調の姿勢と、リアリズムの視点から考える中国のダムによる「上流における非協力的な覇権国」としての批判、この2点の間に存在している「相互依存と相互対立」というギャップを埋めるために、メコン河流域の国際環境と中国国内の政治経済的要因から、ダムに関する紛争の解明を通じて中国と流域諸国の関係を考察している。

第6章は中国とインドとの間を流れる南アジアのブラマプトラ川(中国名:雅魯藏布江=ヤルツアンポ川)を事例とし、国境紛争に伴い近年両国間で生じている水資源紛争の要因と実態を解明する。これまでの中印水資源紛争に関する研究は必ずしも中印両国の領土紛争及びその歴史にもたらされた「負の歴史認識」という文脈から明確に分析されていないため、この章はコンストラクティヴィズムの理論から考えた中印関係において、重要な意味を持つ歴史認識や相手国のパワーに対する理解、及び国民のアイデンティティに対する考察を行っている。

第7章は中央アジアのエルティシ川とイリ川上流における中国・新疆の水資源開発の実態、つまり中国はなぜ両河川の水資源を精力的に開発しようとしているのか、その原因を解明した上、カザフスタン国内の水資源問題と同国の中国に対する懸念を論じた後、中国が水資源で対カザフスタンに譲歩した理由について検証している。中国には、地政学戦略実現のため、エネルギー安全確保のためと、少数民族集住地域安定性維持のためという三つの理由が存在している。

第8章は北東アジアにおける鴨緑江と図們江はいかに中国の国内河川から中・朝・露3カ国の国境河川となったのか、その背後にある近代の歴史に触れ、次に現在の両河川流域における多国間協力進展の様子を水力発電が中心になる水資源の開発、航行的利用に関する水路の打開及び河川の中の島や砂州の開発という3つの側面から実態解明をする。また、東アジア地域における国際河川が、なぜ中国にとっていかに重要なのかに関しても論じている。

第9章は結論部分であり、上記の4つの事例研究によって導かれる結果を比較した後、まとめを行っている。また、南シナ海問題から、国際河川問題に与えた波及的影響及び国際河川の水資源をより協調して利用できる政策提言をして終わっている。

5 論文の特質

本論文は、メコン開発、プラマプトラ川、中央アジアにおけるイリ・エルティシ川、北朝鮮との国境にある鴨緑江と4つの河川について当事国（そして、時には環境汚染を告発・管理しようとする国際組織、国際NGO等）が抱える実情・紛争の分析と、国家間の紛争解決に向けた取り組みについて、それぞれ資料を渉猟しながら検証を試みたものである。詳細に調査を行った形跡があると同時に、本論文には、以下の3点の特質が存在している。

第一に、国境をめぐる国際河川について論じているが、一つの事象を契機として国家間紛争が他領域にも拡大する実態に鑑み、中国周辺国それぞれとの網羅的關係についても分析の対象としている。即ち、貿易・経済関係を通じた中国・ASEANとの相互依存関係、プラマプトラ川のみならず種々の国境紛争を抱える中印関係（そして、そこに介在する国際環境組織と国際環境NGO）、カザフスタンとの間における国際河川協力、そして中朝「鮮血関係」を背景とした鴨緑江での国家間協力について詳述している。

第二に、比較分析を行い、二つの次元（紛争の可能性が高いか低いか、協力する共通利益が高いか低いか）について考察を行っている。どの河川も中国は上流地域を占めていて、前提状況は同じであるにも関わらず、インドとの間には紛争が絶えず、ASEANとの間ではある程度の制度化が進み（ただし、その約束は必ず守られるわけではない）、カザフスタンとの間では高次元の協力関係が成立し、北朝鮮との間ではその時々によって濃淡はあるか、基本的には協力が継続している。こういった前提が同じであるが、対立・協力の結果が異なる要因について、（やや不十分ながら）比較分析を行っているところである。

第三に、中国はこれらの河川の上流地域を占めているだけに地政学的に優位な立場にあるが、それだけに周辺国から批判を受けやすい。これについて、ある程度客観的に考察をしている点である。国際政治専攻の留学生が執筆する論文には、時に自国政府の代弁のような主張を行うことがあるが、本論文はそういった政治的・国家的偏向とは別物である。とりわけチベット高原の環境破壊について、周辺諸国からの批判を紹介し、中国政府・企業の行っている乱開発が生態系に与える影響について、それに関わっている海外政府・国際機関・NGOからの批判も含み入れた形で検証を行っていることである。主査は来日した留学生に対して、

①自国の主張を相対化すること、と同時に②論文内容の主張によって将来不利益を被らないような内容を執筆すること、の二点を指導しているが、学位申請者の批判は客観的なデータに基づいて展開されていて、この点でも社会科学の論文として評価できる考える次第である。

以上、大きな特質に加え、分析と同時に政策提言まで踏み込もうとする意欲、国際政治理論を現状分析に適用しようとする点等、博士論文としての的確な記述が多く見られる。

6 論文の評価

元来、水資源を巡る国際政治は、その大体が海洋空間についてである。その意味で、本論文は海洋とは異なる河川地域に焦点を当てたものであり、とりわけ日本が国際河川を有していないという特殊事情とも相まって、邦語で書かれた論文としては数少ない先行業績である。

また、中国は14の国と国境を接しているが、本論文ではメコン川を巡ってベトナム、ラオス、ミャンマーと同時にASEAN事務局の動向、プラマプトラ川を巡ってインド、イリ・エルティシ川を巡ってカザフスタンとロシア、鴨緑江をめぐる北朝鮮と、隣接している国家数の約半分を網羅した包括的な研究となっていることである。この点についても、学位請求者の精力的な取り組みを評価したい。

もっとも、全く問題がないわけではない。口頭試問で課題となったのは、主に以下の3点である。第一に、覇権安定論の視角である。地政学的に川の上流を占める中国にとって「覇権」を有することは間違いないが、「安定」をもたらすかどうか不明である。現に、インド、東南アジア諸国との間で河川開発をめぐる紛争は生じているため、「公共財」の議論が見られない覇権安定の議論を展開しているように見えてしまう。

第二に、中国の言う協力や紛争解決のための制度化は、本当に対等な意味での制度化なのかという疑問である。「人を殴って、その人に対して大丈夫か」という「上から目線の優しさ」であって、「高次元の協力」を生み出すものでないかという疑問が提起された。

第三に、本論文の研究・クエスチョンについて、「『開発』と『開発外』となった要因を探る」と書かれているが、「開発外」とはどういう意味か、周辺諸国という変数は独立変数なのか、従属変数なのか、不明であるという点である。

もっとも、これらの質問に関して、口頭試問の際に学位請求者から説明があったと同時に、必要な修正は最終提出までに行うことが述べられた。論文全体の評価に関わるわけではないが、修正すべき小さな疑問は幾つか存在した。

7 論文の判定

本学位請求論文は、政治経済学研究科において必要な研究指導を受けたうえ提出されたものであり、本学学位規程の手続きに従い、審査委員全員による所定の審査及び最終試験に合格したので、博士（政治学）の学位を授与するに値するものと判定する。

以上

主査氏名（自署）
